

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 16 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580179

研究課題名(和文) 東日本大震災後の民俗文化にかかわる災害民族誌研究の国際的ネットワーク構築

研究課題名(英文) International networking of disaster ethnography research on the intangible cultural heritage after the Great East Japan Earthquake

研究代表者

高倉 浩樹 (Takakura, Hiroki)

東北大学・東北アジア研究センター・教授

研究者番号：00305400

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災によって被災した地域社会の復興において無形民俗文化財は重要な役割を果たしている。その調査研究の応用的側面の実施状況を海外に向けて発信し国際的ネットワークを構築することが本事業の目的である。三年間のなかで、国際研究集会等をイギリス、ニュージーランド、インドネシア、日本において4回開催したほか、メンバーによる国際学会での参加報告も多数実施した。その結果、日本研究における災害民族誌の重要性を国際的に確認した。また神楽・祝祭・儀礼などの地域の記憶に関わる無形文化遺産に着目する災害協働人文学の重要性を国際的に喚起することに寄与した。ニュージーランドの研究者とは共同英文論文集出版計画を立てた。

研究成果の概要(英文)：The intangible cultural heritage contributes community recover process after the Great East Japan Earthquake and Tsunami. The purpose of the project is to broadcast abroad the results of the related applied anthropology in Japan and to network international scholarship of the field. Through three years period, we organized four international workshops (or session) in UK, New Zealand, Indonesia, and Japan and participated to read the paper in many international conferences. These activities encouraged international concerns of disaster ethnography in Japan studies. We also contribute to awaken the international scholarship the importance of disaster collaborative humanities focus on local memory and cultural heritage such as festival, ritual and performing arts. We also have plans of publication (in progress) both in English and Japanese involving the scholars in New Zealand.

研究分野：文化人類学

キーワード：災害人類学 サルベージ 日本研究 無形民俗文化財 研究ネットワーク

### 1. 研究開始当初の背景

東日本大震災後、人類学・民俗学分野ではさまざまな形で被災状況や復興過程に関わる調査および実践的支援活動が行われてきた。被災地には多数の分野の研究者や実践団体も数多く種々の活動がおこなれ、こうしたなかで人類学者の貢献の一つは津波被災農漁村における無形民俗文化財の調査支援実践を行うことだった。このような被災地に関わる民族誌的研究の成果は、現在十分な形で国際発信されていない。その理由は様々であるが、一つには震災の民族誌的研究の方法、いわゆる「文化の翻訳」の難しさに由来していると思われる。隣接・関連分野が数量的データを前提とした課題解決型・理論的考察という形で研究が公開されるのとは比べると、人類学分野は記述的な資料の蓄積を中心としており、また津波被災地の沿岸部農漁村の民俗文化の記録の理解は、日本民俗学的知識をある程度必要とする。この点を踏まえての国際的ネットワーク貢献が求められていた。

### 2. 研究の目的

本事業の目的は、震災復興における地域社会復興と無形民俗文化の関係を扱った民族誌資料を整理しながら、その学術価値を国際的に共有し、調査研究・教育に関わるネットワークを構築することである。特に、震災と復興にかかわる当事者の主観的な記述的資料の価値を理解してもらい、それを共通の土台として国際的研究体制を構築することをめざす。このことは、東日本大震災を経験した日本の人類学が担わなければならない責務であり、また被災地の民族誌としての普遍的価値を、国際的な研究ネットワークを通して広めていくことは長期的にも重要だと考える。

これを実現するために、本事業では、海外の人類学とりわけ、広い意味での日本研究者を中心とする国際的ネットワークの構築を行う。なぜなら、彼ら自身にとって被災した民俗文化は、研究のみならず教育上も重要な対象となりうるからである。国際研究集会の主宰や国際学会での発表を行って幅広くこの問題の重要性を訴えると共に、日本語の記述的資料を読むことのできる日本研究者と連携をとり、東日本大震災に災害研究を行う国際的共同研究ネットワークを構築する。

被災と復興過程の民族誌・人類学研究は、被災者への支援の実践的領域において役立つものをめざすことはいまでもない。と同時に、どのようにして災害を経験し、いかに日常を取り戻していくのか、そこでの諸問題や理論的課題は、国際的な災害研究のなかで、適切に検討されていく必要がある。

### 3. 研究の方法

本事業は従来東北大学を中心に行われてきた震災記録プロジェクトの中核メンバーで実施した。(イ)被災地の無形民俗文化調査

の状況については、これまで本事業の研究チームでおこなってきたものを基盤としつつ、それ以外の調査報告についての資料収集と整理を行った。(ロ)それらの成果を、国際学会で発表するとともに、関係国の日本研究分野組織を訪問し、報告を行った。その上で(ハ)交流実績を構築した国から研究者を日本で招聘し、国際研究集会を実施した。これらの一連の過程を踏まえることで、東日本大震災にかかわる災害民族誌研究の国際的ネットワーク構築の基盤を形成し、東北大学を拠点として継続的に活用できる体制を整えることができた。

国際的発信の主要なターゲットは近年地震・津波の大きな被害をうけたインドネシア及びニュージーランドとした。両国は自国の問題として無形の民俗文化の被災という状況を抱えているからであり、この点で両国と交流関係を構築することは重要な意義がある。もちろん広範な国際ネットワーク体制を構築するため、英米圏およびそれ以外との国との交流も可能な限り実施した。とりわけ、イギリス・ケンブリッジ大学の日本研究者との連携を試みた。

メンバーの高倉は、代表として事業計画全体を総括するとともに、ニュージーランドとの交流事業を担当した。木村は副代表としての代表を補佐するとともに、インドネシアとの交流事業を担当した。岡田は英国との交流事業を担当した。滝澤は無形民俗文化財の調査の全般的状況についてそれぞれ岩手県・福島県の状況を調べて概況をまとめる役割を果たした。

### 4. 研究成果

#### (1) 国際的ネットワーク構築

国際的ネットワークについては、2013年度は、この事業を行うための予備的活動であった。第一に、国際学会での分科会主宰を通して海外研究者とのネットワークを構築を試みた。具体的には2013年8月にイギリス・マンチェスター市において行われた国際人類学民族学連合第17回世界大会で、代表者は「Observing the disaster and/or participating in the aftermath: Exploring the role of anthropologists and the potential of an anthropological perspective on the Great East Japan Earthquake and Tsunami」と題する分科会を企画し、本事業メンバー及びその他の研究者による発表をおこなった。このことで会議に参加した世界の研究者、とりわけ関心をしめした欧米の人類学者と、被災民俗調査の活動報告を海外でおこなう可能性についての打ちあわせを行った。そのことで今後国際的ネットワークが、イギリス・ドイツ・スペインの研究者との見通しを得た。また被災民俗文化財研究資料に関わるオンラインデータベースの構築を行ったが、そのなかで英語の説

明文書を作成し、海外の日本研究者が利用しやすい体制を構築した。これによって次年度に本格的な活動展開を行うための基盤をつくった。

2014年度は2回にわたって研究会事業を実施した。7月にはケンブリッジ大学/慶應義塾大学訪問教授のブリギッテ・シテガ氏を東北大学に招聘した。シテガ氏はケンブリッジ大学で日本研究講座の研究者で専門は人類学である。さらに10月にはニュージーランド・カンタベリー大学で国際ワークショップ「Tohoku/ Christchurch: Reflections on the Socio-cultural Impacts of the Quakes」を共同主宰した(ニュージーランド側はクライストチャーチ大学のスーザンブーテレイ教授)。発表参加者は日本側4名、ニュージーランド側8名で、それ以外に13名が参加し二日間にわたって議論を行った。これらを通して海外の日本研究者と東日本大震災における研究者と役割と教育上の役割について討議し、最終年度にむけて国際シンポジウムを開催する見通しを得た。

これ以外にも、5月には千葉で行われた国際人類学民族学学会中間会議2014年では高倉が発表した他、11月にはインドネシア・ガジャマダ大学で行われた「震災と宗教」に関わる国際会議において、高倉・木村・滝澤の3名が参加し発表をおこなった。2015年3月に行われた国連世界防災会議では、本プロジェクトの成果についてポスター発表も行った。これら活発な活動によって、メンバーが震災後に行った津波被災地の無形民俗文化財サルベージ調査事業について、海外の研究者にむけてその社会的意義と研究上の意義を主張し、賛同を得ることができた。特に近年大規模な自然災害を経験した国では、人文学分野の復興への研究上関与は至急確立する必要がある問題であることを確認した。

2015年度はこれまで築いてきた国際研究ネットワークを稼働させ、国際シンポジウム「災害後の人文学プロジェクトの回顧と研究者の役割の探求 Reviewing the Humanities and Qualitative Social Sciences Projects After Disaster and Exploring the Role of Researchers」(東北大学東京分室)を2015年10月に東日本大震災とインドネシア、中国の事例を比較する形でおこなった。また宗教学、考古学、文化行政などの隣接学問分野との連携についても検討した。この会議を通して人類学を含む人文学が災害復興に対して専門的知見から貢献することが確認された。特に災害をどのように住民が認識しているのかを文化研究の観点からは解明すること、災害記録を世代を超えて継承していく方法の開発が今後の課題。震災を未来にどう伝えるかという課題を参加者で共有することができた。発表者は12名、海外参加国はニュージーランド(クライストチャーチ大学)、インドネシア(ガジャマダ大学)、中国(四川大学)、デンマーク(オールボー大学)で、

国内からは東北大学及びメンバーの所属機関以外に4機関(筑波大学、大阪国際大学、国学院大学、東京文化財研究所)から発表があった。なお、オールボー大学の研究者は、代表者が東北大学東北アジア研究センター客員准教授として招聘した日本研究の人類学者である。この研究者との知己は、代表者が発表した2014年の国際人類学民族学学会中間会議で得た。

これらの活動を通して、当初は東日本大震災に絡んだ災害人類学を基軸とした国際的ネットワーク構築の取り組みが、インドネシアやニュージーランド、さらに中国などの自然災害をも視野に入れ、さらに人類学、宗教学、文学など災害人文学の構築の必要性を国内外の研究者・一般社会に提起することになった。

## (2) 東日本大震災と災害人類学

一方、東日本大震災の研究については、東北大学の取り組みだけでなく、隣接県の福島県や岩手県における震災無形民俗文化財受託調査のあり方を検討した。そのなかで東京文化財研究所との連携が確立された。このことで同研究所が媒介する形で、三県の調査結果を閲覧できる体制を構築した。それ以外には、多くの国際学会や研究会活動を通して、国内大学に勤める海外出身の日本研究を専門とする人類学研究者、また災害人類学に関心をもつ国内の若手研究者との連携も実施できた。それらを通してこの問題に関わる民族誌調査はインドネシアと南三陸町の比較、菩提寺、東京における原発避難者、沖縄における自主避難者、気仙沼とウガンダの比較など地理的、テーマ的な広がり必要性を確認した。

同時に宮城に限定されていた東日本大震災にかかわる民族誌的知見については、福島の事例も含めた知見をえる機会をもった。そのことで従来探求してきた東日本大震災の津波の影響とその復興に関わる災害人類学の領域と異なり、原発爆発による放射能被害の影響について人類学はどのようにアプローチすべきかその萌芽的知見を得た。

また災害人類学の一つのメニューとして、文化行政と連携しながら調査事業の運営の必要性を明らかにすると共に、そのための方法論として集団的拡散的民族誌調査方法の重要や文化サルベージ論がその理論的基盤になることが確認された。

これらの活動によって国内外の関連研究者が交流する機会を提供し、災害民族誌研究の拠点としての役割を果たした、といえる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

高倉浩樹, “Lessons from anthropological projects related to the Great East Japan Earthquake and Tsunami: Intangible Cultural Heritage Survey and Disaster Salvage Anthropology”. In John Gledhill(Ed.) World anthropologies in Practice: Situated Perspectives, Global Knowledge. ASA monograph 52. London: Bloomsbury. 2016、印刷中、査読有り

滝澤克彦、地域社会の復興と神社祭礼の再開、神社復興へ向けてー東日本大震災の記録(神社新報社編、神社新報社) 2016年、印刷中、査読無し

木村敏明、他宗教と共に生きる、国際学入門ー言語・文化・地域から考える(佐島隆編、法律文化社) 2015、76-81、査読無し

高倉浩樹、宮城県津波被災地における無形民俗文化財調査、SEEDer:地球環境情報から考える地球の未来、11、2014、82-83、査読無し

滝澤克彦、民俗文化財復活の意味/東日本大震災 宮城県内の被災地調査/「震災前」を「震災後」につなぐ、中外日報、2014/4/2、5、査読無し

岡田浩樹、フィールドワークおよび記録・保存のスキルの被災地学生・大学院生に対する移転-震災被害状況の共同フィールドワークと記録・保存作業を通じたコミュニティ再構築のサポート、平成26年度年度震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費報告書』神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室編、2014、3-40、査読無し

高倉浩樹、宮城県における民俗文化財現況調査について、東京文化財研究所無形文化遺産部 311復興支援 無形文化遺産情報ネットワーク報告書2013 東日本大震災被災地域における無形文化遺産とその復興、2014、23-29、査読無し

木村敏明、二年遅れで復活した20周年周期の祭礼から見えてくる現実、高倉浩樹・滝澤克彦編「無形民俗文化財が被災すること」(新泉社) 2014、102-110、査読無し

滝澤克彦、祭礼を無理に復活させないという選択、高倉浩樹・滝澤克彦編「無形民俗文化財が被災すること」(新泉社) 2014、166-176、査読無し

高倉浩樹、残された御神体と奉納できぬ神楽、高倉浩樹・滝澤克彦編「無形民俗文化財が被災すること」(新泉社) 2014、188-198、査読無し

高倉浩樹、東日本大震災に対する無形民俗文化財調査事業と人類学における関与の意義、高倉浩樹・滝澤克彦編「無形民俗文化財が被災すること」(新泉社) 2014、299-311、査読無し

[学会発表](計 12件)

岡田浩樹、Modernity Emerging in the process of Reconstruction after Big Earthquake in Japan; The complex Relationship between the Community Resilience and the Planning by city engineering”, 2015 International Conference of Japan Anthropology Workshop, 10th September 2015, Bogaziçi University, Istanbul (Turkey).

木村敏明、Revival of festival and religion after Great East Japan Earthquake. International Association for History of Religion. 2015/8/25, Erfurt University, Erfurt (Germany)

高倉浩樹、Toward an applied disaster anthropology: from reflections on post-disaster recovery local memory recording and intangible cultural heritage projects, International Union of Anthropology and Ethnological Sciences Inter-congress 2014, 2015/5/16、幕張メッセ(千葉県・千葉市)

高倉浩樹、The Intangible Cultural Heritage Survey after 3.11 Tohoku Earthquake and the role anthropology, The 6th International Graduate Students and Scholars Conference (IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia, SPECIAL SESSION “The Role of Religious Culture and Social-Human Sciences after Disaster”, 2014/11/19、ガジャマダ大学、ジョクジャカルタ(インドネシア)

木村敏明、Reevaluating Religious Role as a Social Resilience in post 3.11 Japan, The 6th International Graduate Students and Scholars Conference (IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia, SPECIAL SESSION “The Role of Religious Culture and Social-Human Sciences after Disaster”, 2014/11/19、ガジャマダ大学、ジョクジャカルタ(インドネシア)

滝澤克彦、The Varieties of Restoration of Local Festivals Affected by the 3.11 Tohoku Earthquake, The 6th International Graduate Students and Scholars Conference

(IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia, SPECIAL SESSION “ The Role of Religious Culture and Social-Human Sciences after Disaster ”、2014/11/19、ガジャマダ大学、ジョクジャカルタ (インドネシア)

木村敏明、ジャワ島ムラピ山噴火災害と宗教、日本宗教学会、2014/9/13、同志社大学 (京都府・京都市)

滝澤克彦、東日本大震災における被災した神社祭礼復興の諸相、「宗教と社会」学会第22回学術大会、2014/6/21、天理大学 (奈良県・天理市)

高倉浩樹、Toward an applied disaster anthropology: from reflections on post-disaster recovery local memory recording and intangible cultural heritage projects、International Union of Anthropology and Ethnological Sciences Inter-congress 2014、2014/5/14、幕張メッセ (千葉県・千葉市)

高倉浩樹、Lessons from anthropological projects related to the Great East Japan Earthquake and Tsunami、17th World Congress of International Union of Anthropology and Ethnology, Manchester University, Manchester (UK), 2013/8/6

木村敏明、To continue or Not? Dispersed community and ritual revival after GEJET, 17th World Congress of International Union of Anthropology and Ethnology, Manchester University, Manchester (UK), 2013/8/6

岡田浩樹、What is the “public” in stricken area? Difference between GEJET and the Great Hanshin Earthquake, 17th World Congress of International Union of Anthropology and Ethnology, Manchester University, Manchester (UK), 2013/8/6

〔図書〕(計 2 件)

高倉浩樹・滝澤克彦編、無形民俗文化財が被災するということ、新泉社、2014、318頁

高倉浩樹・滝澤克彦編、東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査 2012 年度報告集、東北大学東北アジア研究センター、2013、327頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高倉 浩樹 (TAKAKURA, Hiroki)  
東北大学・東北アジア研究センター・教授

研究者番号：00305400

### (2) 研究分担者

木村敏明 (KIMURA, Toshiaki)  
東北大学・文学研究科・教授  
研究者番号：80322923

滝澤克彦 (TAKIZAWA, Katsuhiko)  
長崎大学・多文化社会学部・准教授  
研究者番号：80516691

岡田浩樹 (OKADA, Hiroki)  
神戸大学・国際文化学研究所・教授  
研究者番号：80322923